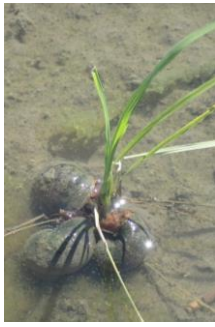




病害虫発生予察情報予報第 2 号 (6 月の予報)




佐賀県農業技術防除センター




6 月 1 日～8 月 31 日の 3 か月間は農薬危害防止運動期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病害虫 (抜粋)
水稲 (早期)	葉いもち	やや多	 <p>スクミリンゴガイ</p>
	イネミズゾウムシ	やや多	
水稲 (早植え)	葉いもち	やや多	
	イネミズゾウムシ	並	
水稲 (普通期)	葉いもち	並	
	スクミリンゴガイ	多	
	<p>1. 病害虫全般 (いもち病、トビイロウンカ等) 育苗箱施用剤は、薬剤の効果を確認するため、適正量をむらなく処理する。</p> <p>2. スクミリンゴガイ 被害を防止するため、移植後の浅水管理や薬剤防除、用排水路での貝及び卵塊の捕殺等を組み合わせた総合的な防除対策を地域ぐるみで徹底する。防除対策の詳細は、令和 6 年 5 月 21 日付病害虫対策資料第 5 号および「スクミリンゴガイ防除対策マニュアル (農水省 HP)」を参照する。</p> <p>3. もみ枯細菌病・白葉枯病 もみ枯細菌病が育苗箱で発生した場合や、白葉枯病の常発圃場では、これら病害に登録のある育苗箱施用剤を必ず処理する。</p>		
水稲全般	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	やや少	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
イチゴ (育苗圃)	うどんこ病	並	 ハダニ類
	苗立枯症 (炭疽病・疫病・萎黄病)	並	
	ハダニ類	多	
	アブラムシ類	やや多	
	1. ハダニ類 一部で多発生圃場がみられる。本圃での発生を抑えるため、育苗期の防除を徹底する。薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達の可能性が低いとされる気門封鎖系薬剤を活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いものが多いので、5~7日間隔での2回散布を1セットとし、発生状況に応じて数セット散布する。		
2. 苗立枯症（炭疽病、疫病、萎黄病） 前作では、炭疽病により本圃で大きな被害を受けた圃場がみられた。今作での発生を抑えるため、親株床から定期的な薬剤防除を徹底する。また、伝染抑制効果が高いビニル雨よけ下での育苗を行う。さらに、その日の天候やポットの乾き具合を考慮して灌水を実施すること、ポット間隔を十分にとり通風を図ること等、高湿度条件が長時間続かないよう注意する。なお、立枯性病害が発生した株は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。			
アスパラガス	茎枯病	やや多	 褐斑病
	褐斑病	やや多	
	斑点病	やや多	
	アザミウマ類	並	
	ハダニ類	並	
1. アザミウマ類 気温の上昇に伴い、施設外からの飛び込みが多くなるため、虫見板への払い落としを行うなどして発生状況を確認し、早期防除に努める。			
2. 茎枯病、褐斑病、斑点病 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。各病害とも予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する。降雨が続く場合や、前年多発生圃場及び既発生圃場では、散布間隔を短縮する。茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし、雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。			
施設果菜類	1. アザミウマ類、コナジラミ類 施設内に残ったアザミウマ類やコナジラミ類の野外への拡散を防ぐため、栽培終了時に施設の密閉処理（蒸し込み）を必ず行い、これらの害虫を死滅させる。なお、次作の定植までの期間が短い作型であっても、日中の高温日を確保できるよう適切な密閉期間を設ける。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
果樹全般	果樹カメムシ類	多	 チャバネアオカメムシ
	<p>1. 果樹カメムシ類 本年のチャバネアオカメムシの越冬虫数は平年より多いことから、本年 4~8 月における本虫の発生量は平年より多いと予想される。今後、樹園地に飛来する可能性が高まるため、圃場をよく観察し、飛来を確認したら早急に防除を行う。</p> <p>2. 病害全般 6月は例年降雨日数が多いので、降雨の合間を確認して早めに防除を行う。</p> <p>3. スピードプレイヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。</p>		
カンキツ	そうか病	並	 カンキツ かいよう病
	かいよう病	やや多	
	黒点病	やや多	
	灰色かび病	並	
	ミカンハダニ	少	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	<p>1. 傷果、落果防止(灰色かび病、チャノキイロアザミウマ、果樹カメムシ類等) 灰色かび病やチャノキイロアザミウマ等の傷果の原因となる病虫害に対する防除を徹底する。</p> <p>2. かいよう病 6月までは本病の重要な防除時期であり、今後の多発生を防ぐため、本病が発生しやすい園および幼木園では防除を徹底する。</p>		
ナシ	黒星病	並	 ナシ黒星病
	ナシヒメシンクイ	並	
	<p>1. 黒星病 6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用するが、既に発生している場合はDMI剤を散布する。また、6月下旬頃は主要な感染時期であるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。</p> <p>2. 夜蛾類 被害を防止するため、忌避灯を設置する。また、点灯開始前に、点灯の有無、点灯時の園内の明るさ(2ルクス以上)及び点灯時間を必ず確認する。</p>		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
ブドウ	黒とう病	やや多	 ブドウべと病
	べと病	並	
	褐斑病	並	
	1. ベと病 降雨により感染が進展するため、降雨前の予防散布を徹底する。また、べと病の罹病葉は伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。 2. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 小豆大の時期までの防除を徹底する。袋かけ前（大豆大期）に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。		
キウイフルーツ	1. かいよう病 感染防止のため、6月までは <u>すべての園において</u> 、銅水和剤を主体とした <u>定期的な薬剤防除を実施</u> する。なお、幼木は成木に比べ発病しやすく、また枝枯れや樹液の漏出など症状がひどく出やすいため、特に防除対策を徹底する。		 葉の斑点症状
茶	炭疽病	多	 炭疽病
	カンザワハダニ	やや少	
	クワシロカイガラムシ	やや少	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	
	チャノコカクモンハマキ	並	
	チャノホソガ	やや多	
	1. 炭疽病 防除適期の新芽開葉初期に薬剤を散布する。二番茶摘採後に枝条更新を行わない園では、必ず薬剤を散布する。本病は、降雨時に新芽に感染するため、降雨前の予防剤による防除を基本とし、降雨後は浸透性殺菌剤で防除を実施する。多発が予想される場合には、保護殺菌剤（開葉期）と浸透性殺菌剤（2～3葉期）の体系防除を実施する（詳細は令和6年5月21日付け病虫害対策資料第4号参照）。 2. クワシロカイガラムシ 第一世代幼虫ふ化最盛期に薬剤散布できなかった発生園では、7月頃の第二世代のふ化最盛期の3～4日後に薬剤を散布する。 3. チャトゲコナジラミ 成虫の発生ピーク2週間後頃（目安は成虫の発生が終った頃）の若齢幼虫発生期に裾部を中心に薬剤を散布する。また、裾刈りして残さを土壌混和すると効果的に寄生密度を低下させることができる。		

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害総合防除計画」も参照してください。

病虫害総合防除計画掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html

QRコード→



II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（4 ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

6 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 6 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 6 年 5 月 23 日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年よりやや多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 6 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	30 (23.5℃)	40	並
降水量	20	40 (327 mm)	40	やや多い

Ⅲ. 6月の予報

[【概要に戻る】](#)

水稻（早期、上場地域）

定期調査：12圃場

調査日：5月17日



定期調査圃場の様子

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

気温は並、降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 畦畔に放置された予備苗や残り苗は、葉いもちの伝染源になるので、速やかに処分する。

(2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

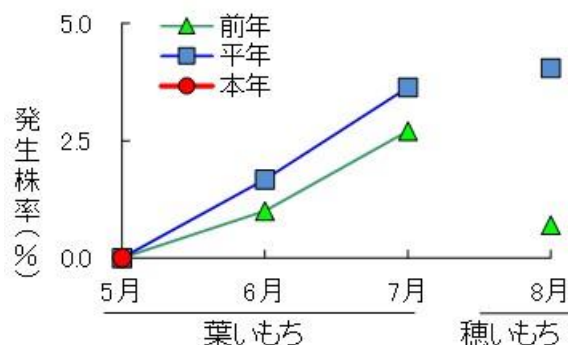


図1 早期水稻でのいもち病の発生推移

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 食害株率：51.3%（平年39.5%、前年69.3%）

平年比：やや多（±～+）

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上確認されたら、薬剤防除を行う。

水稻（山間早植え）

[【概要に戻る】](#)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

令和5年産の山間早植え水稻における穂いもちの発生は、平年並であった。（±）

(2) 6月の気象予報

気温は並、降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 畦畔に放置された予備苗や残り苗は、葉いもちの伝染源になるので、速やかに処分する。
- (2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

- (1) 前年の発生状況（越冬密度）
前年の発生は平年並で、越冬数は平年並と考えられる。〈±〉
- (2) 6月の気象予報
気温は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、薬剤防除を行う。

水稻（普通期）

[【概要に戻る】](#)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

- (1) 前年の穂いもちの発生状況
令和5年産の普通期水稻における穂いもちの発生は、平年よりやや少なかった。〈-~±〉
- (2) 6月の気象予報
気温は並、降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 苗いもちの発生がみられたら、早急に取り除き、防除を行う。
- (2) 畦畔に放置された予備苗や残り苗は、葉いもちの伝染源になるので、速やかに処分する。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

2. スクミリングガイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

- (1) 越冬状況（図1参照）
令和5年(2023年)12月~令和6年(2024年)2月の佐賀市の平均気温は8.7℃であり、平年(7.2℃:10年平均)より高かったことから、水田内での越冬生貝率は平年より多いと推定される。〈+〉
※冬期の気温と翌春の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められる。
- (2) 6月の気象予報
気温は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

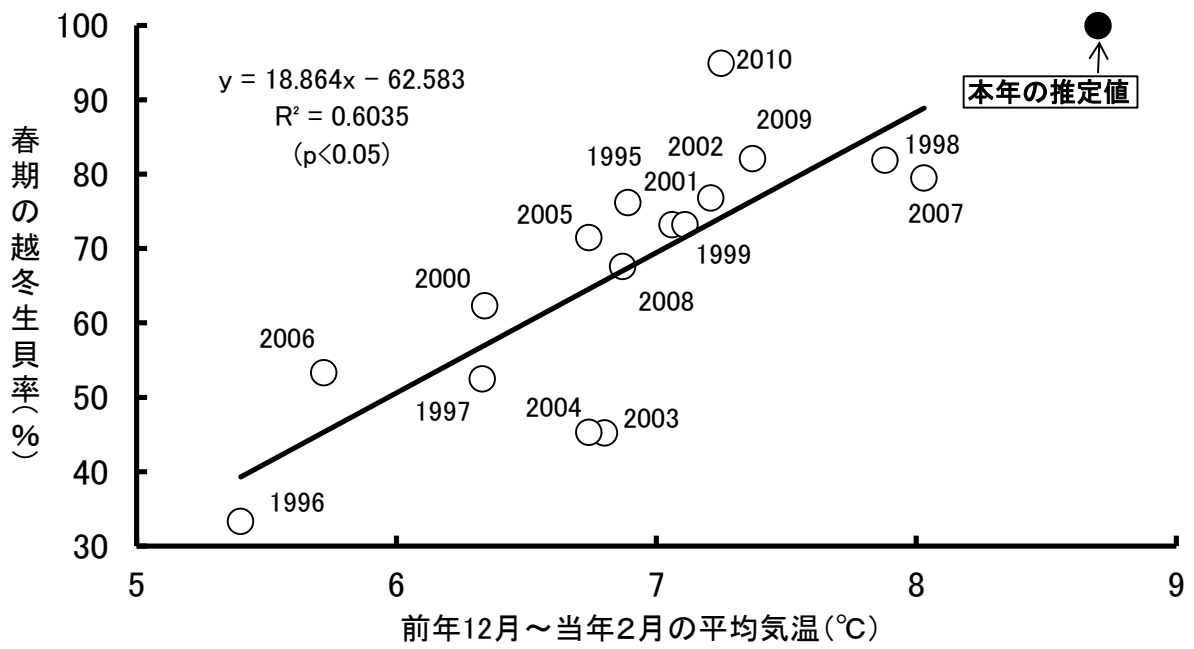


図1 水田内でのスクミリンゴガイの越冬生貝率と冬期の平均気温との関係

○:1995～2010年の実測値(佐賀市の気温と、佐賀市内の同一水田における越冬生貝率。水田の越冬調査は2010年で終了)、●:2023年12月～2024年2月の気温を用いて上記の関係式から推定した本年(2024年)春季の越冬生貝率。

1. 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（早期水稲）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

② 小麦における20回すくい取り（表1参照）

ヒメトビウンカ幼虫数10.5頭（平年37.4頭、前年80.9頭）

平年比：少（-）

(2) 近年の動向（第2表参照）

小麦から採集したヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒率は、近年低く推移している。

（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病はヒメトビウンカが媒介するため、ウンカ類を対象とした育苗箱施用剤を使用する。

(2) 発病株が認められた圃場では、発病株を抜き取るとともに、ヒメトビウンカの防除を行う。

表1 各調査地点（小麦圃場）におけるヒメトビウンカおよびイネ縞葉枯ウイルスの保毒状況（令和6年5月7～8日採取）

調査地点	20回すくいとり虫数 (各地点2圃場平均)	イネ縞葉枯ウイルス保毒状況 ^{注)}		
		供試虫数	陽性虫数	保毒率
佐賀市1	5.5	11	0	0%
佐賀市2	0.5	1	0	0%
鳥栖市	14.0	28	0	0%
神埼市	2.0	4	0	0%
小城市1	4.5	9	0	0%
小城市2	26.0	52	0	0%
多久市	11.5	23	0	0%
武雄市	21.5	43	0	0%
鹿島市	19.0	38	0	0%
吉野ヶ里町	2.0	4	0	0%
白石町	9.0	18	0	0%
平均	10.5	231	0	0%

注)ヒメトビウンカ成虫および中老齢幼虫を供試したELISA法による検定。

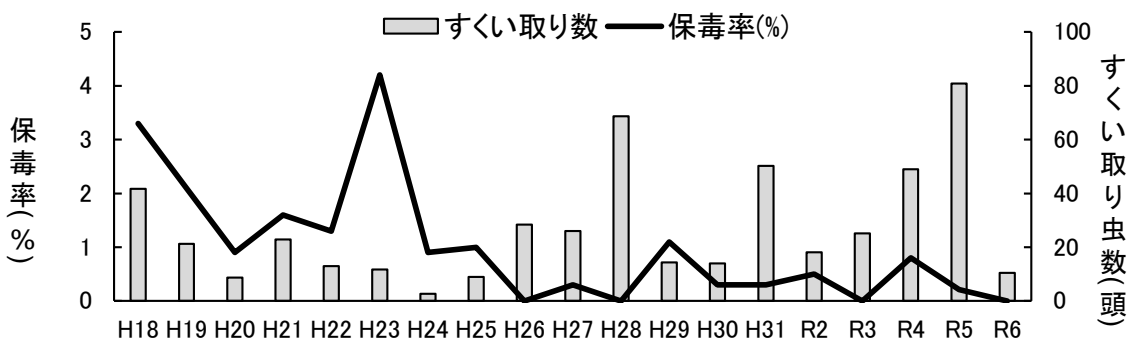


図1 県内の小麦圃場におけるヒメトビウンカすくい取り数とイネ縞葉枯ウイルス保毒率の推移。

イチゴ（育苗圃）

[【概要に戻る】](#)

定期調査 10 圃場
調査日：5月17～22日



1. うどんこ病

1) 予報の内容
発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年 9.4%、前年 5.6%）
平年比：やや少（-～±）

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 定期的な薬剤防除を実施する。

定期調査圃場の様子

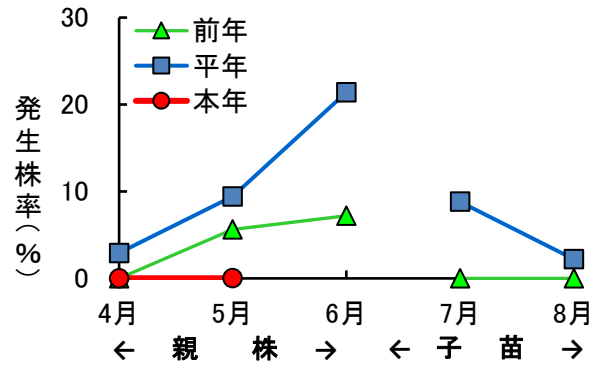


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

2. 苗立枯症（炭疽病・疫病・萎黄病）

1) 予報の内容
発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年 0.02%、前年 0.06%）
平年比：やや少（-～±）

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

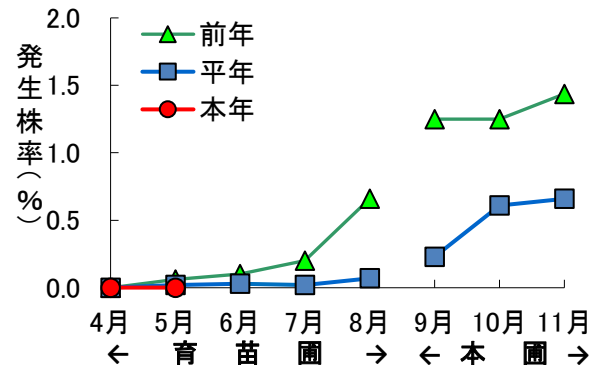


図1 イチゴ立枯症の発生推移

3. ハダニ類

1) 予報の内容
発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：26.0%（平年 6.7%、前年 14.0%）
平年比：多（+）

(2) 6月の気象予報

気温は並で、降水量はやや多く、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

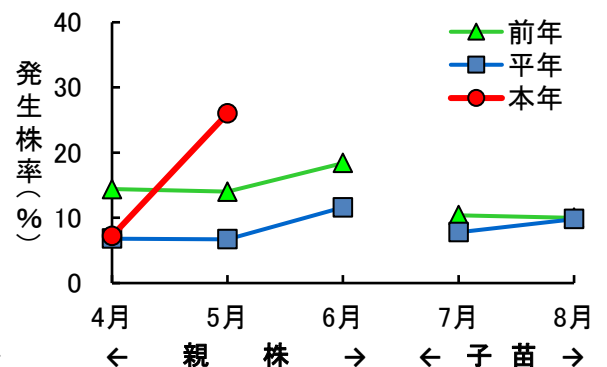


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

- (1) 圃場により薬剤感受性が異なるため、防除効果を確認し、薬剤を選定する。
- (2) その他については、特記事項を参照。

4. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：14.8%（平年9.9%、前年4.8%）

平年比：やや多（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。

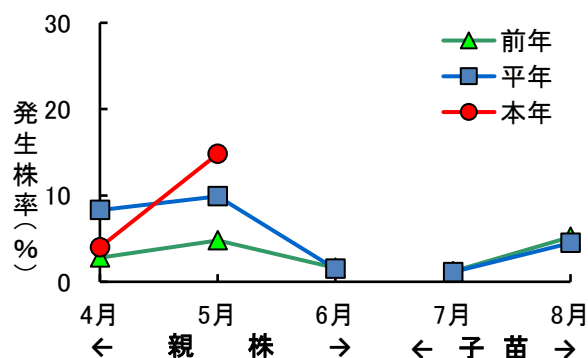


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

アスパラガス

定期調査：8圃場

調査日：5月17～22日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. 茎枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生茎率：0%（平年0.1%、前年0%）

平年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

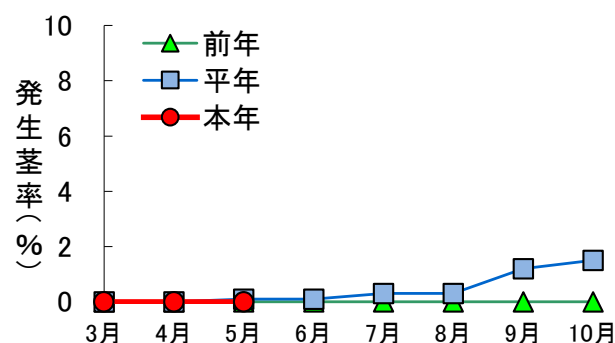


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0.4%、前年0.7%）

平年比：並（±）

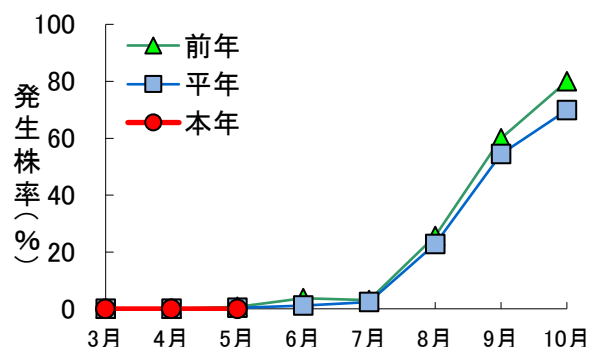


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

- (2) 6月の気象予報
降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

3. 斑点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年 0.7%、前年 0%)

平年比：並〈±〉

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

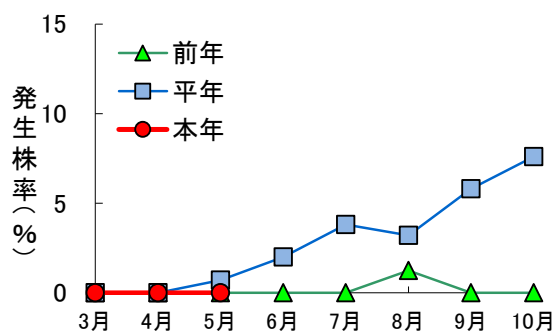


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

4. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：30.6% (平年 40.3%、前年 48.6%)

平年比：やや少〈一～±〉

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

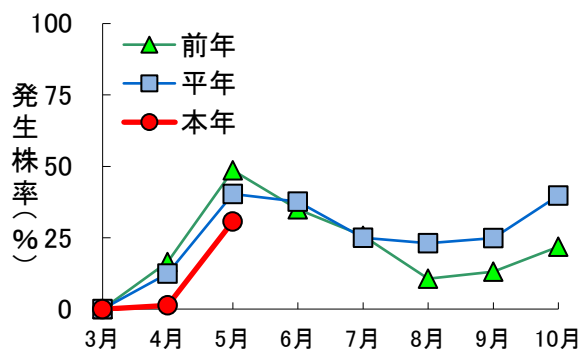


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査

① 越冬地点率：84.2% (平年 40.1%、前年 52.9%)

平年比：多〈＋〉

② 平年越冬虫数：0.84 頭/m² (平年 0.28 頭/m²、前年 0.29 頭/m²)

平年比：多〈＋〉

・地点別データ等は令和6年度病害虫発生予察情報第1号(4月の予報)を参照。

(2) 発生の現況

①予察灯 (図1 参照)

平年比：並 (±)

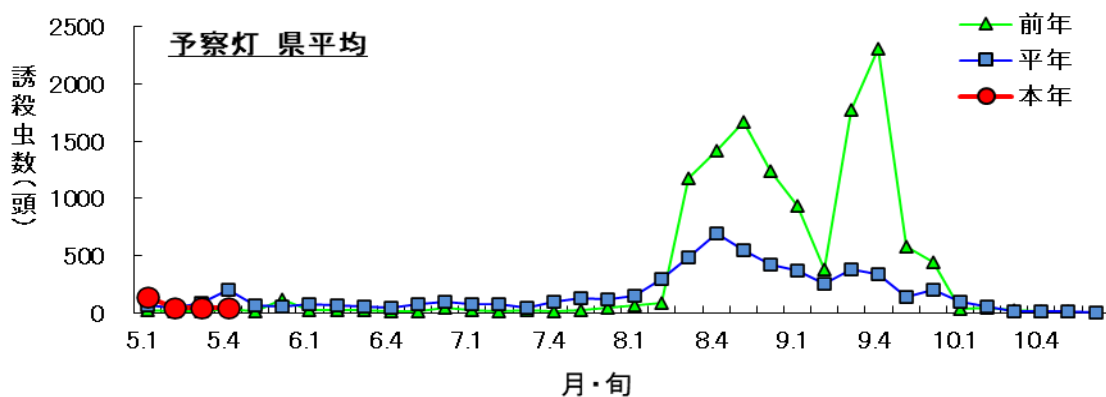


図1 予察灯 (佐賀市、小城市) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

②フェロモントラップ (図2 参照)

平年比：並 (±)

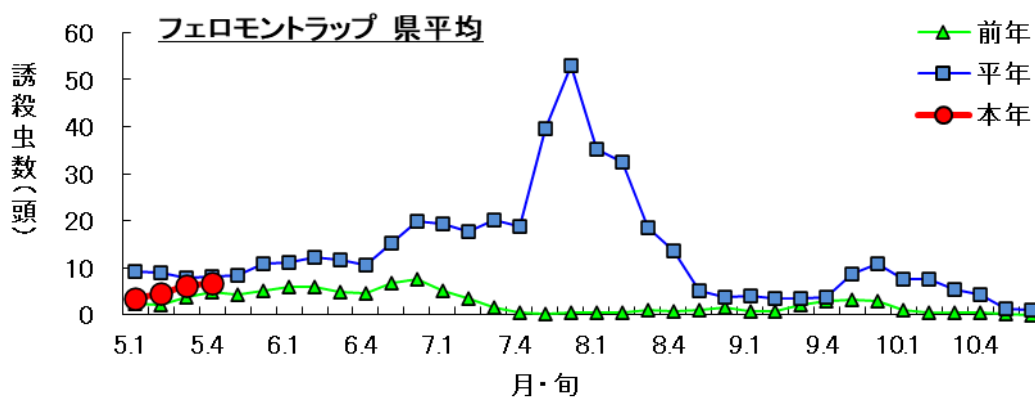


図2 フェロモントラップ (小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、唐津市鎮西町、基山町、太良町) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生状況は地域や園により異なるため、園内外を確認し、発生が確認されたら防除を行う。
- (2) その他については、特記事項を参照する。

カンキツ

定期調査：8 圃場
調査日：5 月 16～17 日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. そうか病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0% (平年 0%、前年 0%)

平年比：並 (±)

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果実に薬害を生じる場合があるため、デランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。ただし、1回目の散布から200mm以上の降雨があれば薬害を生じにくい。

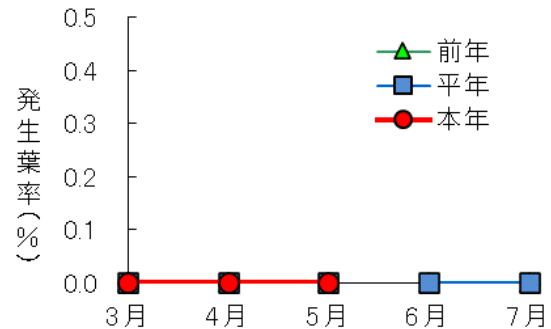


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0% (平年 0%、前年 0%)

平年比：並 (±)

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種 (レモン、ネーブル、はるみ等) の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園 (幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等) など発生が問題となる園では、無機銅剤水和剤 (クレフノン 200 倍加用) で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20~25 日とする。
- (2) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため行わない。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

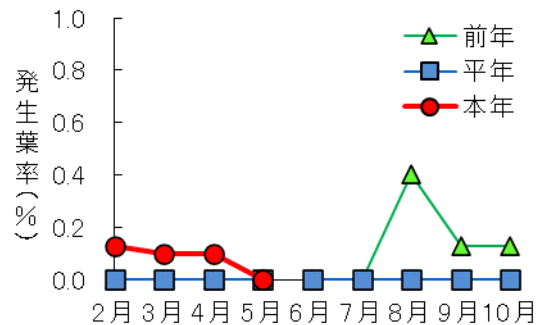


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果実に感染しやすい梅雨期に薬剤防除を徹底する。
- (2) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、累積降雨量が 200~250mm (マシン油乳剤加用の場合は 300~400mm) に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後 1 ヶ月を目途に回りの散布を行う。
- (3) 枯れ枝や剪定枝は伝染源となるため除去し処分する。園内に残った切り株は抜根するか、ビニルの袋などで全体を覆って病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

4. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0.3% (平年 8.0%、前年 12.1%)

平年比：少 (<-)

(2) 6月の気象予報

気温は並、降水量はやや多く、やや少発生の条件 (<-~±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 低密度時 (寄生葉率 30%未滿または1葉当たりの雌成虫数が0.5~1頭) に防除を行う。

(2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

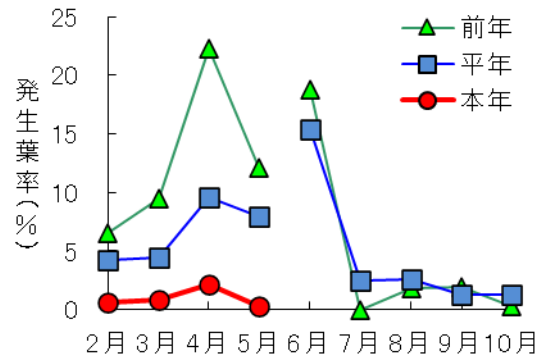


図1 ミカンハダニの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 黄色粘着トラップ (図1 参照)

平年比：やや多 (<±~+)

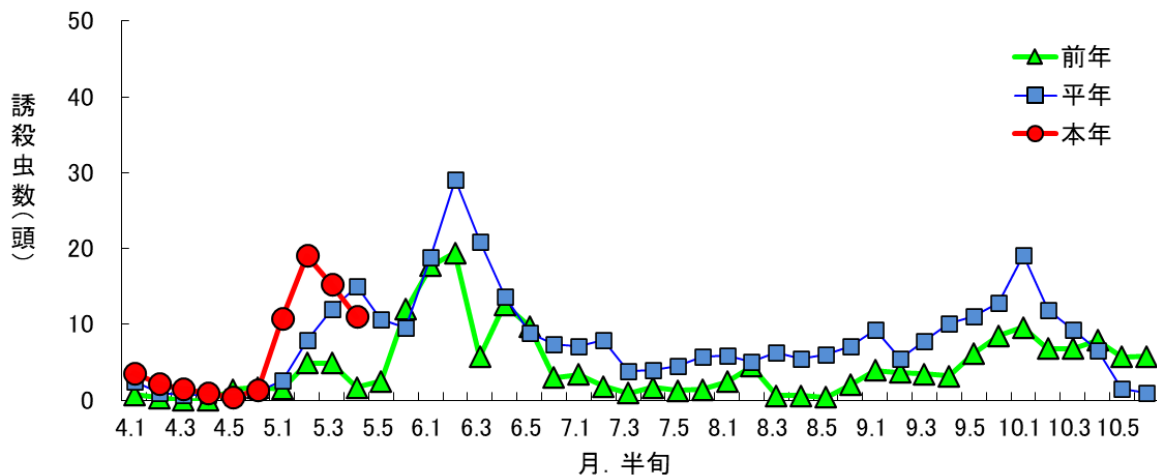


図1 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移 (果樹試験場調査)

(2) 6月の気象予報

気温は並、降水量はやや多く、やや少発生の条件 (<-~±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 近年の第2世代成虫の発生ピークは6月上旬頃である。被害を防止するため、6月上旬までに薬剤防除を実施する。

(2) 本虫の発生源となるイヌマキ、サンゴジュ等を防風樹として植栽している園では特に発生に注意し、防除を行う。

ナシ

定期調査 (9 圃場)
調査日 : 5 月 20 日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量 : 平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図 1、2 参照)

発生葉率 : 0.2% (平年 0.7%、前年 0%)

平年比 : やや少 (一~±)

発生果率 : 0% (平年 1.0%、前年 0%)

平年比 : やや少 (一~±)

(2) 6 月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病葉や発病果実は伝染源となるため除去し、処分する。
- (2) 曇雨天が続くと発生が多くなるので、天候を見ながら適切に防除する。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

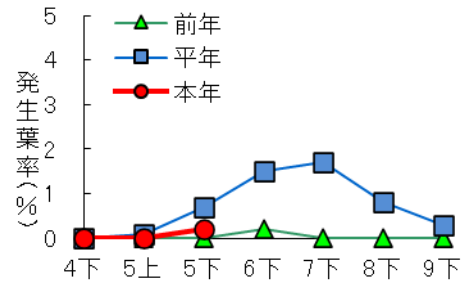


図1 ナシ黒星病 (葉) の発生推移

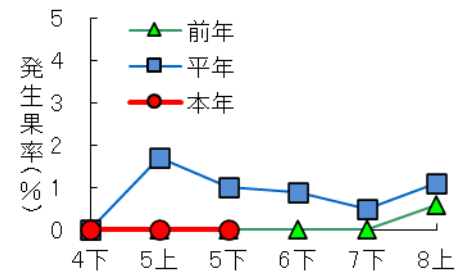


図2 ナシ黒星病 (果) の発生推移

2. ナシヒメシンクイ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 県内に設置したフェロモントラップ (図1 参照)

平年比：並 (±)

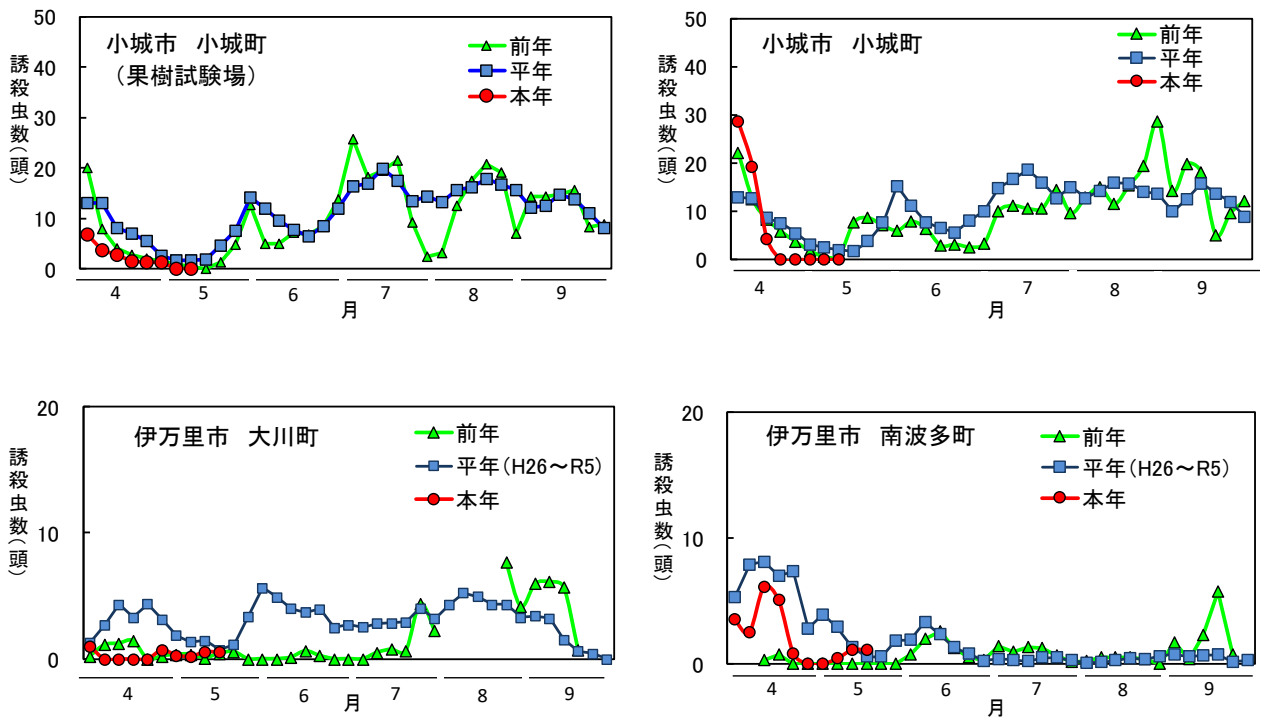


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移
(果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 交信攪乱性フェロモン剤の設置を予定している園では、6月上旬までに設置する。

ブドウ

定期調査 (6圃場)
調査日：5月16～17日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0% (平年0.5%、前年0%)

平年比：並 (±)

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病枝葉の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

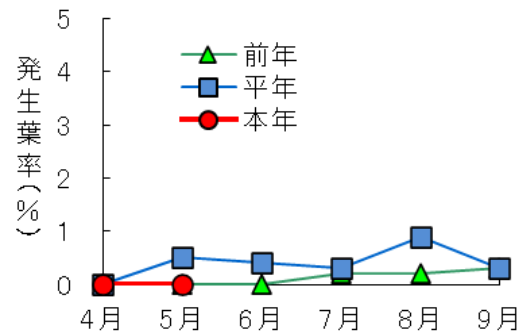


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0% (平年0.1%、前年0%)

平年比：やや少 (一~±)

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) ブドウベと病では、ストロビルリン系殺菌剤 (アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等) に対し耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。

(2) その他については、特記事項を参照する。

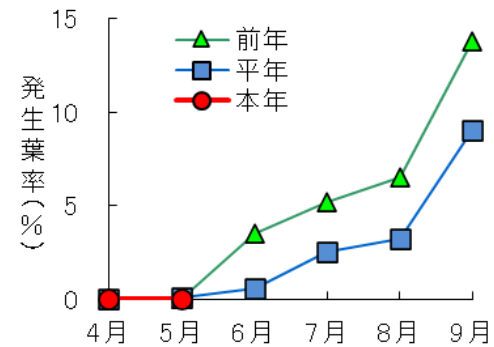


図1 ブドウベと病の発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 黄色粘着トラップ (カンキツのチャノキイロアザミウマ (図1) 参照)

平年比：やや多 (±~+)

(2) 6月の気象予報

気温は並、降水量はやや多く、やや少発生の条件 (一~±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 6月中旬~7月中旬頃は主要な加害時期であるため、薬剤防除を徹底する。

(2) 袋内への侵入を防止するために、袋の締め口をしっかりと締める。

茶

[【概要に戻る】](#)

定期調査7圃場

調査日：5月16～17日



1. 炭疽病

定期調査圃場の様子

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉数：8.3枚/m²（平年0.02枚、前年0枚）

平年比：多（+）

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

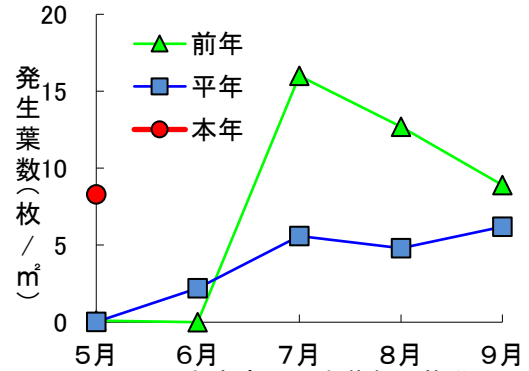


図1 炭疽病の発生葉数の推移

2. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

虫数：0.1頭/4ヶ所（平年7.7頭、前年1.7頭）

平年比：少（-）

②吸引粘着トラップ（図2参照）

平年比：やや多（±～+）

(2) 6月の気象予報

気温は並、降水量はやや多で、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 6月上旬頃から発生密度が高くなるため、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。

(2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

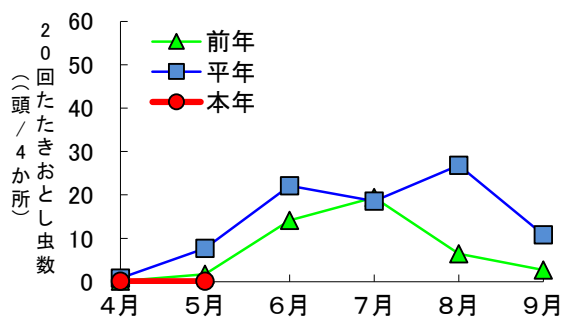


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

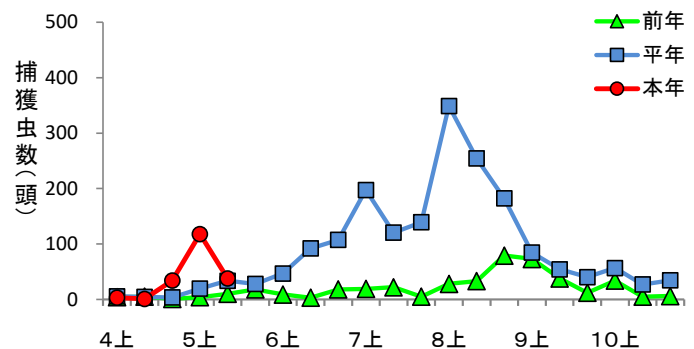


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

3. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：0.9頭/4ヶ所 (平年1.6頭、前年0.6頭)

平年比：並 (±)

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。

(2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

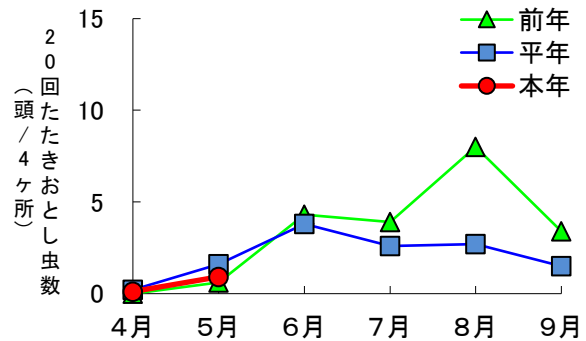


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

4. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1 参照)

被害葉数：0.1枚/m² (平年0.1枚、前年0枚)

平年比：並 (±)

② フェロモントラップ (図2参照)

平年比：並 (±)

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発蛾最盛期から7～10日後頃の若齢幼虫期に防除を行う。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

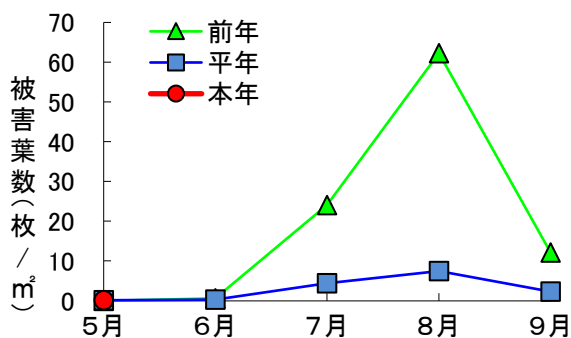


図1 チャノコカクモンハマキの被害葉数の推移

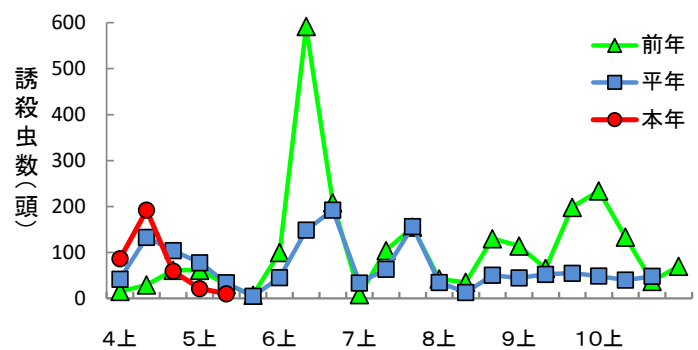


図2 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの旬別誘殺虫数の推移 (嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

5. チャノホソガ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照、)

被害葉数：0.3 枚/m² (平年0.1 枚、前年0.1 枚)

平年比：やや多 (±~+)

② フェロモントラップ (図2 参照)

平年比：並 (±)

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発蛾最盛期から7日後頃が防除適期である。卵から幼虫が葉裏に潜行する新葉展開期に薬剤が十分かかるように散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

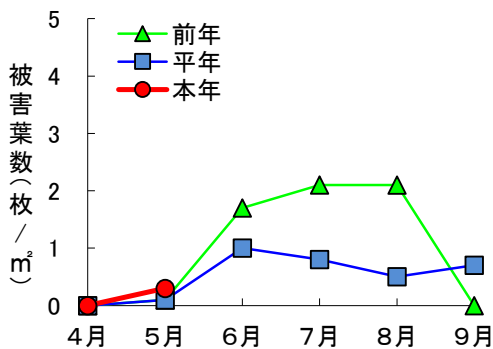


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

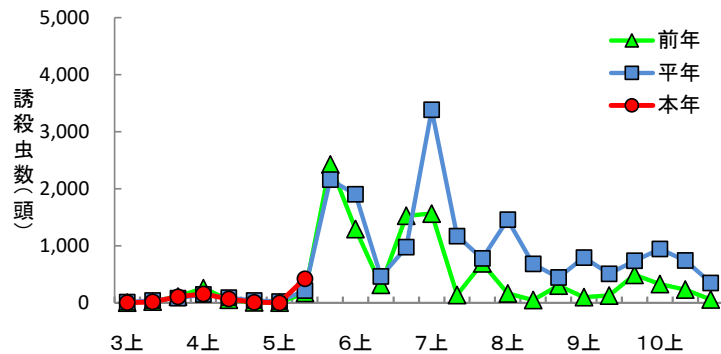


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの旬別誘殺数の推移
(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html

